

日本のいしばし

福岡県嘉麻市のリブアーチ型石橋 「幻の石橋」文化財指定へ



遠賀川の源流域近くに架かる仮称・掛橋の石橋。安全性を確保するため、現在は立ち入り禁止
写真提供／福岡県立朝倉高等学校 史学部

福岡県嘉麻市桑野の遠賀川源流域近くに架かる、リブアーチ型石橋(仮称・掛橋の石橋)を文化財に指定しようという動きが加速している。

同市は熊本大学の山尾敏孝名誉教授にこの石橋の調査を依頼。昨秋、その調査結果の報告が行われた模様で、「嘉麻市桑野地区所在のリブアーチ型石橋の総合評価と保存活用方針について」と題された報告書の一部が嘉麻市の「議会だより63号」(2022年2月1日発行)に次のように紹介された。

「架設時期は19世紀後半の幕末と推定される。石材は、地元で産出され、高い強度を有する花崗岩を使っている。架設位置の川の状況に対応するため、それまでに修得した土木技術等を参考にして、地元石工集団が、この地区独自のリブアーチ形式を考案し架設したと推測できる」。また評価については、「桑野地区独自の石橋文化が、小規模ながら形成されたことが判明し、県内の石橋文化に新たな評価を与える可能性を有した石橋である」、「遠賀川上流域のリブアーチ型石橋群の中で唯一存在

する石橋は、桑野地区の有する地理的、地質的条件が生み出した文化遺産であり、その独自性においても県内で大変珍しく非常に価値ある文化遺産である」と報告されている。

2019年からの福岡県立朝倉高等学校の生徒のこの石橋に関する部活動(史学部)が新聞記事やネットニュースになり、その後も新聞やラジオ、テレビで取り上げられ、昨年度は市の予算に石橋調査費用が計上される動きにつながった。

毎日新聞の報道によると、嘉麻市は昨年12月13日の定例市議会において市長がこの石橋の文化財指定に向けた作業を進める方針を明らかにし、石橋の調査とその存在を広めた同校に何らかの形で謝意を表す考えも示したという。

同校史学部顧問の泉信至教諭は、「このたびの動きに驚くとともに、調査を進めてきた部員共々とても喜んでいきます。文化財指定へとご尽力いただいた方々のおかげです。石橋の恒久的な保存と有効な活用がなされることを期待しています」と喜びを語った。(広報部)

休刊記念号 中面の案内

2面 休刊記念 会報「日本のいしばし」の歩み
8面 大園橋の撤去を住民が要請(小手川清隆)
12面 石橋技術者養成講座(尾上一哉)

4面 石橋の保全に取り組む団体紹介
10面 石橋の魅力をネットで発信
15面 追悼 上塚尚孝会長

石橋ファンの思いと共にあった会報の歩み

会報「日本のいしばし」は本号で通算100号となった。1980年9月に日本の石橋を守る会が結成され、翌年の1月に会報が創刊された。以来、石橋ファンの興味や関心、石橋を地元の貴重な文化財として大切に思う人々の願いを受け、石橋に関する情報を伝えてきた。創刊から41年の時が流れ、本会の歩みとともにあったこれまでの冊子形式の「日本のいしばし」は100号を節目に休刊となる。ここではその休刊を静かに記念して、会報の制作に関わった人物と会報が伝えてきたトピックを振り返ってみよう。(広報部)



1985年1月発行の17号
表紙は甲突川に架かる高麗橋。鹿児島県が甲突川五石橋を撤去する方針を示したため、その保存を望む声を伝えた



1981年1月発行の創刊号
表紙は諫早眼鏡橋。初代会長で郷土史家の井上清一氏が「庶民の文化財『眼鏡橋』」と題して巻頭に寄稿した



1990年1月発行の34号
表紙は和歌山市の不老橋で、湾岸道路が完成する前の姿。リゾート開発の在り方が問われた景観保護運動を取り上げた



1982年10月発行の8号
表紙は長崎大水害で被災した長崎眼鏡橋。中島川石橋群や現川石橋群ほかの被害状況を伝え、復元を訴えた

「日本のいしばし」創刊号の発行は1981年1月。初代事務局長を務めた長崎県諫早市の石橋研究者・山口祐造氏が編集を担当し、年に3、4回のペースで会報を発行した。

創刊の翌年に起きたのが長崎大水害。被災した石橋群の復元を紙面で呼び掛けた。第5回総会を鹿児島市で開催した84年は、甲突川五石橋の文化財としての高い価値を訴えたのだが、鹿児島県は五石橋全てを撤去する方針を示した。その後の会報ではその保存を望む声を繰り返し報じることとなった。

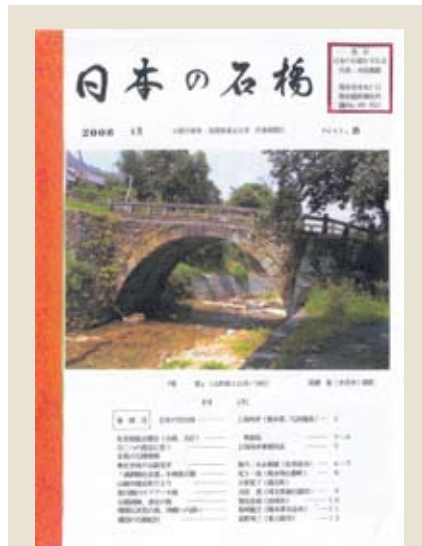
山口氏は病氣入院により2000年3月発行の65号を最後に事務局長ならびに会報編集者を退任。第2代会長兼事務局長・片寄俊秀氏が会報制作を担当して同年9月に66号を発行するとともに、創刊号から66号までを「日本のいしばし」日本の石橋を守る会・会報アーカイブ「上・下巻」の2冊にまとめ、12月に出版した。

翌01年に福岡県久留米市で開催された第22回総会で、副会長の本田義雄氏が第3代会長、事務局長に上塚尚孝氏が就任。事務局が熊本県に置かれることとなり、会報制作を浦田勝美氏が担当して「日本の石橋」のタイトルで2010年1月まで年1回のペースで1

石橋存続の危機と保全の必要性を伝えた「日本のいしばし」



2020年9月発行の97号
表紙は熊本地震と豪雨による被災からの復旧が完了した通潤橋。中面では令和2年7月豪雨による被災石橋などを紹介



2008年6月発行の8号(通算74号)
表紙は山形県上市市の観橋。長崎県佐世保市で開催された第29回大会の様相や滋賀県の石橋などを紹介した



1994年1月発行の46号
表紙は甲突川に架かる西田橋。前年に鹿児島水害が発生して新上橋や武之橋など15橋が流失。石橋の被災状況を伝えた



2021年9月発行の99号
表紙は東日本大震災による被災から復旧した東京都の常磐橋。コロナ禍により2020年から2年連続で大会が中止に



2016年8月発行の89号
表紙は熊本地震で被災した宇土市の船場橋。熊本県各地の石橋の被災状況を紹介する特集が組まれた



1997年12月発行の58号
表紙は西田橋の梯子胴木。鹿児島県の木原安妹子氏が西田橋の解体に密着し、岩永三五郎の技術の高さを紹介した

号から10号を発行。大会の様相や全国各地の石橋調査の情報、加えて新たに発見された石橋なども紹介した。

10年に熊本県上益城郡山都町の町長・甲斐利幸氏が第4代会長に就任。病気で入院することになった浦田氏に替わって尾上一哉氏が会報制作を担当し、タイトルを「日本のいしばし」に戻して通算77号を発行。翌11年4月に78号第1版を制作したが、同月に開催された第32回総会で編集ライターの中村まさあきが広報を担当することが承認され、6月にレイアウトを修正した会報78号第2版、7月に79号を発行。その後は年2回のペースで今回の100号まで発行を続けてきた。

創刊から40年余りが経過したが、石橋に対する社会の評価はどのように変わったのだろうか。依然として河川改修や道路整備、地域開発などによる石橋の撤去が続く中、想像を超えた豪雨や大きな地震などが起き、災害のたびに石橋が被災し、その後は石橋に存続の危機が迫った。しかしその一方で、石橋を郷土史の中に位置づけ、地域の景観を構成する貴重な文化財として扱った事例が増えてきたことも、過去の会報から読み取れる。

休刊となる100号を機に、石橋ファンと共にあった会報の歩みを確認したい。(16面に関連記事)

石橋を文化財として認め 保全に取り組む各地の団体

九州を中心に各地に残る貴重な石橋。しかし河川改修や道路拡幅などの整備工事の際、豪雨による被災の後などに次々と撤去され、その数は減少の一途。それに対し、各地域では石橋を文化財として認め、先人の地域振興への思いなどを後世に受け継ぎ、石橋を地域の重要な振興資源として位置づける団体が活動が続いている。石橋に絡みついた草木の除去や清掃、景観の保護、石橋架設関係者の顕彰、石橋の保全のための健全度評価や設計・施工・修復技術の追求、石橋技術者の養成など、各地で多様な取り組みが行われている。ここではそうした活動が続ける8つの団体に寄稿を依頼した。(広報部)

2015年に平山温泉内に公園を整備して移設保存された平山橋
写真提供/上妻信寛



山鹿文化財を守る会

代表者 上妻 信寛
会員数 約30人
結成 1970年
事務局 〒861-0501 熊本県山鹿市山鹿1731-1
事務局長 木村 元浩
TEL 070-3819-4713

本会は山鹿市ならびに熊本県北部の文化財保護を目的に1970年に結成されました。県立鹿本高校と鹿本商工高校の考古学部OB・OG・現役部員が主な会員で、史跡巡りや文化財パトロールなどの文化財保護活動に力を入れてきました。

山鹿市には弥生時代後期から古墳時代前期ごろと推定される県内最大級の集落遺跡「方保田東原(かとうだひがしばる)遺跡」があり、県北部には全国でも屈指の数を誇る裝飾古墳が存在しています。

石橋では県内最古の「洞口橋」(1774年架設、1994年復元)などが残っており、石橋保存活動については、1971年ごろから山鹿市の「大坪橋」(1865年架設)や「湯町橋」(1814年架設)の移設保存運動に取り組みました。そうした活動を契機に1980年、日本の石橋を守る会の第1回大会が山鹿市で開催されたことは喜ばしい出来事でした。

2011年には山鹿市の平山温泉郷を流れる岩村川に架かる「平山橋」(1861年架設)の

- 4面 山鹿文化財を守る会
- 5面 山都町の石橋を守る会
- 5面 八女上陽の「ひふみよ橋」を守る会
- 6面 院内石橋群景観保全協議会
- 6面 美里町石橋愛好会
- 7面 一般社団法人 石造文化財技術機構
- 7面 一般社団法人 石橋伝統技術保存協会
- 8面 豊岡のめがね橋を守る会

※結成年順



会員数 約242人
(個人会員167人、団体会員約75人)
結成 1980年
事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2
通潤橋史料館内
担当者 事務局長 軸丸 英頭
TEL 0967-72-3360
メール jim@ishibashi-mamorukai.jp

「寄口橋架設100年記念特別企画」開催時の集合写真=2021年2月28日
写真提供/ほたと石橋の館



八女上陽の「ひふみよ橋」を守る会

会長 久間一正 会員 53人 結成 2012年
 事務局 〒834-1102 福岡県八女市上陽町北川内589-2
 担当者 内田 理絵
 TEL 0943-54-2150
 メール Info-hotaru@joyo-town.jp
 ホームページ https://joyo-town.jp/hotaru

福岡県八女市を流れる星野川には、明治から大正期に架設された、上流から順に1・2・3・4連のアーチ橋が架かり、「ひふみよ橋」の愛称で親しまれています。

本会結成のきっかけは、2012年7月の九州北部豪雨災害でした。激しい豪雨により4連アーチの宮ヶ原橋は完全に水没。「流された」と誰もが思いましたが、川の水が引いた後、高欄や中詰め土などが流出したものの、橋の本体がしっかりとした姿を現し、落ち込んでいた

私たちを勇気づけてくれました。ところが、橋脚に流木が引つかかって洪水被害を拡大させたとの住民の意見があり、石橋撤去の声も上がりました。

先人の熱い思いや卓越した技術が刻み込まれた石橋をなんとか未来に残していきたいとの思いから同年9月、地元有志が集まり、本会を結成。市長に石橋保存に関する陳情書を提出しました。そして宮ヶ原橋の復旧工事が行われることとなり、住民の安全や利便性を確保し、周りの景観に配慮しつつ、石橋を現

地保存することができました。

本会では石橋の清掃や学習会などを実施してりましたが、故上塚尚孝会長が「人間は誕生日を祝いますよね。長年私たちの生活を支えてくれている石橋だって誕生日を祝ってもらっていいでしょう」との言葉に背中を押され、石橋の節目の誕生日を祝うイベントも開催するようになりました。

2022年は復旧した宮ヶ原橋が100周年を迎えます。多くの方々と一緒に祝いでできれば幸いです。

山都町の聖橋。アーチの奥に国道橋の橋脚が立っている
写真提供/石山信次郎



山都町の石橋を守る会

会長 浜田 浩二
 会員 約15人
 結成 2005年
 事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市27
 担当者 石山 信次郎
 TEL 0967-72-0240

熊本県の山都町には、大小20橋のめがね橋があります。本会は名工・岩永三五郎が1832年に架設した「聖(ひじり)橋」の保存を目指して1991年に発足した「聖橋を守る会」を前身としています。

1937年に聖橋のすぐ脇に新橋が完成した後、石橋の右岸側の壁石が壊されてしまい、管理者不在のまま石橋は草木に覆いつくされていきました。91年12月の熊本日日新聞に「岩永三五郎も泣いている」と、聖橋の状態を嘆く記事が載ると同会が結

成され、聖橋の修理保存の必要性を広く町民に訴える活動を行いました。間もなく聖橋は町の文化財に指定され、99年になって修理保存工事が行われました。その後の2005年、山都町の石橋の保存・活用と石橋文化の向上に資することを目的に会の名称を「山都町の石橋を守る会」に変更しました。

町内の石橋の中で存在感抜群なのは今も現役の水路橋「通潤橋」(1854年架設)です。熊本地震では通水管のつなぎ目の漆喰が破損したため、本会は

通潤橋復興事業支援金を集め、10万円を町に寄付しました。その後大雨で壁石の一部が崩落したため、石材を全て回収し、積み直す工事が行われました。そしてコロナ禍の中の20年7月になって、4年3カ月ぶりに放水が復活しました。

ただ現在もコロナ禍の影響が大きく、本会としても従来のような活動ができない状況が続いています。通潤橋の路面への立ち入り禁止の解除について、町に検討をお願いするなどの働きかけを行いました。

豪雨で被害を受けた白岩橋=2017年

写真提供/一村一博



美里町石橋愛好会

会長 一村一博
 会員 約20人 結成 2015年
 事務局 〒861-47212 熊本県下益城郡美里町土喰408-1
 担当者 伯川 豊和
 TEL 090-1365-5950
 メール kazuhiro2156@gmail.com

熊本県の美里町を流れる緑川流域は、江戸時代末期以降に架設された多種多様な石橋が現存する「石橋の博物館」と表したくなる地域です。国指定重要文化財「雲石橋」（1847年架設）をはじめ、貴重な文化遺産である美里町の石橋群を守り、地域の歴史や石橋群の価値の顕彰を通じ、地域おこしを図ることを目的として2015年に本会を結成しました。

結成時に進めた石橋実態調査によると、町内には36基の石橋が現存し、そのうち10基が文化財に指定されています。ただ、それらは十分な維持管理がなされていないとはいえず、文化財に指定されていない石橋については草木に埋もれ、標柱や周辺道路に案内板がないものばかりです。

2016年4月の熊本地震では江戸時代末期架設の二俣福良渡橋、馬門場や大窪橋が被災。続く6月の豪雨では井竿橋が流失。白岩橋や下用來橋、西の鶴橋などが被害を被って、次の豪雨で完全に流失しそうな姿となっている状態です。

会員は協力して石橋を覆う草木の除去などを行い清掃管理に努め、石橋の存在が明らかとなるよう、町の支援を得て標柱や案内板の設置を進めました。そのほか、町内4力所の会場を巡回した石橋写真展示会を開催。写真コンクール、石橋ツアー、石橋に関する講演会なども開催しました。

コロナ禍の影響で近年は活動がままならない状況にあります。が、これからも石橋を地元の宝として生かす、まちづくりを目指していきます。

分寺橋とアサギマダラ(2019年10月)

写真提供/院内石橋群景観保全協議会



院内石橋群景観保全協議会

会長 山尾 敏孝 会員 17人 結成 2014年
 事務局 〒879-0453 大分県宇佐市大字上田1030-1
 宇佐市建設水道部 都市計画課内
 担当者 都市計画課 景観・公園整備係 担当者
 TEL 0978-27-8181
 メール tosi05@city.usa.lg.jp

本会は、大分県宇佐市院内町が誇る石橋のある風景を守り、次世代に継承するため、院内石橋群の景観保全活動を推進する目的で2014年に発足しました。院内町には江戸時代末期から昭和初期にかけて架設された大小75基の石橋が残っており、「日本一の石橋の町」と呼ばれています。発足の前年度、市は国土交通省の委託を受け、全ての石橋調査を実施し、点検・修理マニュアルを作成。この取り組みを推進した石橋調査チーム（各地区の住民、学識経験者、石

材業者、市職員から構成）が母体となって設立されました。これまで、石橋の点検や周辺環境整備、広報・啓発活動、資料収集・聞き取り調査などを行ってきました。点検では現状把握と損傷等の早期発見に努め、補修・補強が必要な場合は所有者に修理工法を提案し、保存につなげています。周辺環境整備では草刈などのほか、渡りの蝶・アサギマダラを呼ぶ花・フジバカマの植栽を行い、石橋の新たな魅力づくりに取り組んでいます。広報・啓発活動では出前講

座やセミナー、石橋模型・写真展示などを行い、市内外へ院内石橋群の魅力を伝えていきます。資料収集・聞き取り調査では、これまで忘れ去られていた5基の石橋が発見されました。

現在はコロナ禍により活動が制限されていますが、地域づくりに取り組む団体などと連携し、石橋の景観保全活動を行っています。今後も「石橋と地域と人をつなぐ「架け橋」としての役割を果たす」という同会の活動理念のもと、息の長い活動を続けていきます。

石橋技術者養成講座実習風景(2020年)

撮影/熊本乃親



熊本地震の震災復旧工事が完了した二俣福良渡目鑑橋を訪れた地元中学生を案内(2017年) 写真提供/石造文化財技術機構



一般社団法人 石橋伝統技術保存協会

理事長 尾上一哉 設立 2017年
事務局 〒861-3516 熊本県上益城郡山都町千滝222-1
担当者 総務部長 熊本 乃親
TEL 0967-72-1493
メール acts@ogami.co.jp
ホームページ <https://www.ogami.co.jp/acts/>

一般社団法人 石造文化財技術機構

理事長 山尾 敏孝 設立 2017年
事務局 〒869-1234 熊本県菊池郡大津町引水215-1
担当者 副理事長 中村 秀樹
TEL 096-294-5230
メール e@tosca.jp
ホームページ <https://www.tosca.jp/>

石造アーチ橋は数千年の時を経てなお人の役に立つ「本物の社会資本」です。自然石の物理機能を極限まで簡素化した構造であり、人類の英知の美しい結晶です。その素晴らしい機能は長く人の役に立つ、大切にされるべきものと言えましょう。

ところが日本では、路面の幅が狭い、通水断面が小さい、時代に合わないなどの理由で、社会から除去されてきました。そのことに危機感を持つ日本の石橋を守る会の技術系会員が中心となり、2つの一般社団法人が

派生したことで、石橋を守る道筋が見えてきました。その一つは石造文化財の評価・修復・構築・維持管理の技術を確立し、保存・活用を図る「石造文化財技術機構」I T O S C A。もう一つが石橋を文化財として扱うことができる専門技術者の育成を目的とする「石橋伝統技術保存協会」A C T Sです。2011年から日本の石橋を守る会が主催した石橋構築・修復技術者養成事業を17年にACTSが引き継ぎ、事業の世話人

当機構は、石橋や石垣、古墳などの貴重な石造文化財の評価・修復・構築・維持管理の技術を確立し、保存・活用を図ることを目的とする一般社団法人です。

理事長の山尾敏孝氏は、熊本大学(大学院自然科学研究科)教授だった2008年から17年までの10年間、九州の土木関係者の技術力向上を目指す一般社団法人九州橋梁・構造工学研究会I K A B S Eにおいて、「石橋の設計・施工および維持管理に関する研究分科会」の座長(主

査)を務めました。石橋の健全度評価法の確立を目指した石橋点検要領の作成、補修・補強法および維持管理技術の開発を行い、石橋設計法や保存・活用のための維持管理ガイドラインなどを作成。同分科会には副理事長の中村秀樹氏や常務理事の尾上一哉氏も参加しました。16年に熊本地震が発生。多くの石橋や熊本城の石垣など貴重な石造文化財が被災し、修復への期待が高まる中、国や自治体などが求める文化財修復基準に対し、民間の土木関連事業者が

4月から年間6回開催を目指す学習会のチラシ



豊岡のめがね橋を守る会

会長 谷口 憲治 会員 10人 結成 2018年
 事務局 〒861-0162 熊本県熊本市北区植木町富広 1578
 熊本市田原地域コミュニティセンター
 担当者 森川 孝一 TEL 080-1741-6971
 メール k.morikawa0703@kpe.biglobe.ne.jp
 ホームページ http://www7b.biglobe.ne.jp/~toyooka_meganebashi/

1802年に架設された「豊岡の眼鏡橋」(熊本市北区植木町)は、架設された場所に現存する石橋としては熊本県内最古の市指定文化財です。しかし現在、その姿は路面がコンクリートでかさ上げされ、過去の水害被害後に行われた一貫性を欠いた補修により壁石の積み方が上流側と下流側で異なるなど、ひどく景観を損なった状態で保存されています。本会はこの大変貴重な石橋を架設当時の姿に戻したいと願うメンバーが集まり、2018年に発足しました。

本会の目的を実現するには、地域の方々の理解と多くの費用が必要となります。そのため文化財に関する知識とその保護の大切さについて、多くの人に理解いただくことを当面の目標としてこれまで、石橋の清掃活動や写真展の開催などを行ってきました。

今年、地元住民と小学生向けの学習会「植木寺子屋 田原塾」未来へつなごう郷土の宝」の開催を準備中です。学習会は4月から年間6回の予定で、郷土の伝統文化、橋の歴史

や石橋の仕組みなどを学ぶ座学講座、ミニチュア石橋づくりや石橋周辺の清掃作業体験などを計画しています。

石橋は地域の人々が継承してきた思いや願いが凝縮された地域の文化を物語るものです。そのような文化財に触れることにより、地域の先人の心に接する意識が芽生え、先人への親しみや地域に対する愛着を育むことにつながると考えています。本会では石橋の文化的価値を生かした地域振興に取り組んでいきます。

大園橋

鹿児島県鹿屋市

市指定文化財撤去を住民が要請

「慎重な議論を」と大隅史談会が陳情

鹿児島県鹿屋市の肝属川に架かる市指定文化財「大園橋」の撤去問題が浮上している。2020年7月の豪雨で流木などが石橋に引っかかり周辺に浸水被害が生じたことから、住民らが石橋の撤去または移築保存を市に求めた。そうした動きに対して地元「大隅史談会」(瀬角龍平会長)が立ち上がり、同橋の歴史的价值を考えて慎重な議論をするよう求める陳情書を市長らに提出した。史談会理事を務める本会会員の小手川清隆氏(鹿児島県)に、これまでの動きを伝えてもらった。(広報部)

写真提供/大隅史談会

2021年9月15日付け読売新聞に「鹿屋市文化財『大園橋』撤去へ」との見出しの記事が掲載された。それはわれわれ郷土史を学ぶ「大隅史談会」にとって全くの寝耳に水であった。

明治期架設の2連アーチ橋

肝属川に架かる「大園橋」は鹿屋市に残る数少ない石橋である。この橋は日露戦争が起った1904(明治37)年5月に完成。鹿児島の伊敷から来た石工が地元産の阿多溶結凝灰岩「荒平石」を使って造ったとされる2連アーチ橋。以来100年の年月を超え無事にその姿を見せている。下流側にバイパス道ができ

てから路面は旧道となり、今は車両通行止めにしてある。

橋は1985(昭和60)年前後に撤去の方針が示されたことがある。その時には地域住民が保存活動を展開し、鹿屋市は88年10月に有形文化財(建造物)に指定した。以後は地元住民による保存会がつくられて定期的な清掃活動などが行われていたが、会員の高齢化により鹿屋市が石橋の管理を引き継いでいた。

2020年7月豪雨

2020年7月6日は豪雨となり、橋の周辺家屋およそ9戸が浸水した。人的な被害はなかったが、地元町内会は「想

溶結凝灰岩「荒平石」の2連アーチ

大園橋の架設は1904(明治37)年、橋長29.4m、橋幅3.9m



定を越える雨量の場合は大園橋に流木などが引っかかり、再び浸水被害が起きる恐れがある」と、大園橋の撤去や移築保存を求める要望書を市に提出したこ

とが、今回の突然の撤去報道になったのである。

大隅史談会は、緊急理事会を開催。私を含めた理事一同と荒平石を扱う地元で唯一人となった石材加工技術者の川村忠氏を交え、昨年9月に現地を見学した。

見学会で川村氏は橋に使われている赤みを帯びた石材に触れ、「これは荒平石です。採石場からこまで石を運ぶのは大変だったはず。立派な石橋を造った石工の思いを大切にしてください」と語られた。その言葉を聞いたわれわれは改めて、大園橋の保存の必要性を確信した。

市当局は、石橋の現地保存のために必要となる川の流路変更や石橋の移築保存を検討したが、費用負担の重さなどを理由に撤去の方針を決めた。大園橋が文化財であるため鹿屋市文化財

審議委員会に対し、撤去の前提条件となる文化財解除を諮問。昨年9月と11月に文化財保護審議会が開催されたが、継続審議となった。次回審議会は4月以降に開催される予定で国土交通省から説明があるという。

文化財としての価値が毀損(きそん)したわけでもない石橋を文化財指定解除をしまで破壊するとは、どいう文化財行政であるのか。

「史跡めぐり」催し 文化的価値を周知

大隅史談会は昨年10月7日に大園橋保存についての陳情書を鹿屋市長、鹿屋市市議会議長、鹿屋市教育委員会教育長、鹿屋市文化財保護審議会会長宛てに提出した。11月10日には現地に理事が集まり、熊本大学の山尾敏孝名誉教授、日本の石橋を守る会の尾上一哉氏に検分していただいた。後日、届いた検分の報告によると、一昨年の水害は大園橋だけでなく川の下流側の狭隘(きょうあい)さなど複合的な原因によるとの内容だった。

11月21日には、この問題を広く市民に知らしめようと、「大園橋および長谷観音、瀬戸山神社の史跡めぐり」を催したところ合計33人が参集。本会の役員と外部講師による案内・説明を実施した。参



大園橋の路面を歩く史跡めぐり参加者=2021年11月21日

加者には大園橋の文化財としての価値、一昨年の水害の因果関係などを理解していただけたと思う。

鹿屋市市議会への陳情書は昨年12月9日の文教福祉委員会で審議されたが、こちらも継続審議となった。われわれとしては今夏の雨季に入る前に、何らかの方向性を見出すべく暗中模索の状況である。予断を許さない状況であるが、会員各位のご助言を会員制交流サイト「チームルーム」の掲示板(11面に関連記事)に書き込んでいただけたら幸いです。

(大隅史談会理事・小手川清隆)

石橋の魅力をネットで発信

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、県境をまたぐ移動や現地での食事などの面で行動に制約が生じて石橋巡りもままならないが、その半面でネットの活用が注目される状況が続いている。ここではウェブサイトに（ホームページ）や会員制交流サイト（SNS）を利用した石橋情報の発信、交流を行う会員の情報ページを紹介する。ネットを活用してコロナ禍の石橋の楽しみ方を発見してみたい。（広報部）

贅田岳和理事のウェブサイト 埋もれた石橋に日の目を

「石橋・眼鏡橋・太鼓橋・石造アーチ橋／田の神・庚申塔・仁王像」のタイトルウェブサイトに（ホームページ）で情報発信をする贅田岳和理事（宮崎県）。トップページには石橋情報の一覧表が紹介

介され、石造アーチ橋、石造桁橋、レングアーチ橋などの数が県別に整理されている。その数はおよそ8191橋に上る（2022年1月末現在）。

表示された都道府県地図の地区エリアをクリックし、左側に表示される石橋一覧の中から石橋名を選ぶと、各石橋に関するさまざまなアングルの画像と諸元（基本情報）や説明板の表記などを見ることが出来る。石橋の場所は「Mapion」バナーをクリックすると、その石橋の位置が地図上に示されるので、石橋訪問の際に非常に便利である。

贅田氏はこれまでに、佐賀県現存最古の石造アーチ橋（大覚寺参道橋）をはじめ、約100橋を発売見。「経験を積むと、道路を走っていても下を川が流れている場所がわかるようになります。平均すると、70橋訪ね回ってようやく1橋新発見につながるようになります。

石橋 眼鏡橋 太鼓橋

Q検索



考えてみると情報なしで見つけた100橋という数字は驚異的な数字だと言えないこともありませんが、いままで通ったことのない道路を走ることが、また一つの楽しみでもあります。今年も、埋もれた石橋に日の目を見させることを目標としたいと思います」と、今年1月1日に更新されたページで心境を語っている。

宮川康夫会員のウェブサイト 石工の技術に喝采を送る

宮川康夫会員（奈良県）が情報発信するウェブサイト「宮様の石橋」には、訪れた都道府県が日本地図に示されていて、沖縄県を除く全国の都道府県に印がある。県名をクリックすると、その市町村ごとの石橋やレングアーチ橋、樋門や石門など宮川会員が訪れた場所の数が示されている。石造アーチ橋だけで2174橋、紹介総数は1万4470余りに上る（2022年1月末現在）。

石橋を紹介するページは都道府県ごとと市町村別一覧表に整理され、市町村名をクリックするとその地域の石橋の画像が表示され、宮川氏が訪れた際の印象が親しみやすい口語体で述べられている。「MAP」をクリックすると石橋の位置が「Google地図」などに示され、

Q検索

宮様の石橋



見やすい。

サイト内の「一口メモ」には、石橋巡りをするようになったきっかけは「単身赴任生活における『ヒマつぶし』の手段だった」と述べられている。その一方で石橋に引かれた理由について「私は、このアーチ式石橋が本質的に有する耐用年数の長さに脱帽する。くつついていないのにアーチ形状を維持できるその生命力に脱帽する。そのような潜在的な力を秘めたアーチ形状のものに脱帽する。そして、何よりもすごいのは、重機やコンピューターの無い遠い昔に、そのような構造物を造った石工の技術と住民の熱意である。特に、この石工の技術に喝采を叫びたい」との思いがつづられている。

日本の石橋を守る会

Q検索



本会公式ウェブサイト もの言わぬ石橋の代弁者に

本会の公式ウェブサイトには、会の活動概要、会則、総会案内、過去の石工養成事業などに加え、石橋データベース「日本の「めがね橋」一覽く都道府県別く」が紹介されている。石橋データベースは全国の歴代会員などが収集した情報を基に、費田岳和氏、森野秀三氏、宮川康夫氏の情報を基本情報として、島崎敏之氏、市村幸夫氏、西文昭氏、東浩治氏、柏原氏、熊本国府高校PC同好会などの情報を加えたものである。

また、通算78号以降の会報バックナンバーの閲覧やダウンロードが可能で、2011年(78号)からの本会の活動

や会員の活動内容、全国の石橋情報が確認できる。そのほか、本会のネット掲示板に紹介された情報を収めた「石橋関連情報」、「石橋ライブラリー」では写真や絵画、記録情報などを紹介している。

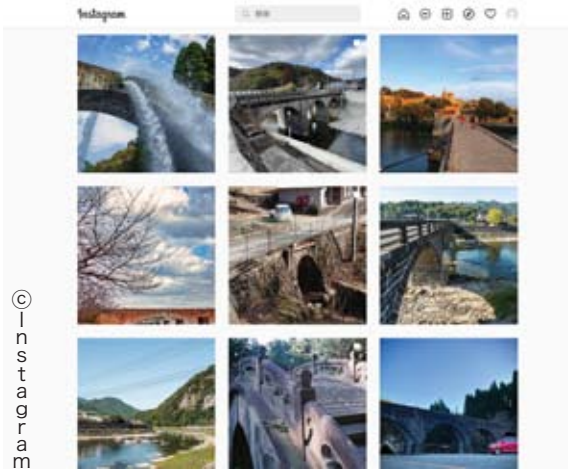
「わが国では石橋をはじめとする地味な土木遺産は、ややもすれば軽視され、無視されてきました。もの言わぬ石橋です。周りにいるものが代弁しなければ、その価値を知られることなく葬り去られてしまいます。日本の石橋を守る会の活動に賛同いただける方、ぜひ入会して石橋の代弁者となってください」とトップページで呼びかけている。

Instagram・交流サイト “映える”写真で共感

スマートフォン(スマホ)やタブレットの普及によってSNSの利用が拡大している。スマホで撮影した画像を投稿して広く紹介できるSNS。その中でもInstagram(Instagram)は、きれいで楽しい写真があふれていて「インスタ映え」の言葉で知られるようになった。撮影した写真の雰囲気を変えるフィルターをスマホで利用できるのも、何気なく撮った写真も“映える”ようになることもその

石造アーチ橋

Q検索



魅力だといわれる。スマホなどに無料アプリをダウンロードし、アプリを起動してメールアドレスやユーザーネーム、パスワードなどを登録すればInstagramの会員(無料)になれば、任意のキーワード検索により、同じ趣味を持つ人たちが投稿した写真などを探して見ることが可能。ネットでは、誰でも投稿できることから、中には攻撃的・差別的であったり、愚痴のように感じられるネガティブな言葉を目にすることもあるが、写真なら気楽に楽しく共感できる。

左の画面イメージは「#石造アーチ橋」で投稿されたInstagramのスクリーンショット。本会の会員が投稿した写真も含まれているようだ。

チームルーム・交流サイト 石橋ファン交流の場へ

理事 森川孝一(熊本県)

会員相互の情報交流を図る試みとして、スマートフォンでも参加できる会員制情報交流サイト「チームルーム」を活用してみたいと思います。参加者(会員)は気になるチームの掲示板を見て、コメントや写真、動画の投稿などができます。

参加希望の方は下記の通り、サイト管理者である「石橋守」(森川孝一)宛てに「チームルーム参加希望」とメールを送信してください。招待メールを送信します。届いたメールの案内に従ってチームルームにアクセスし、そこで自分のメールアドレスとパスワードを登録すれば、すぐに利用が可能になります。メールアドレスはフリーアドレスで構いません。

チームルームはネットで商品価格の比較サイトを運営する株式会社カクコムが提供するサービスで、無料で利用できます。写真や動画、各種ファイルを容量無制限で共有でき、イベント開催告知やアルバム機能などもあります。

石橋に関する情報交換の場として、気軽に利用してみてください。

石橋技術者養成講座 熊本・山都町

「シン北川内橋」架設にチャレンジ

石橋伝統技術保存協会ACTSが運営する石橋技術者養成講座は、解体・保存されていた石材を使った石橋の再生に取り組んでいる。その状況と講座への思いを、同協会理事長で本会理事でもある尾上一哉氏に聞いた。(広報部)

写真提供/石橋伝統技術保存協会



左のQRコードをスキャンすればACTS掲示板にアクセスできます



シン北川内橋架設実習で、支保工の上に輪石を置いて並べる仮組みを行う受講者



仮組み前の輪石を高圧洗浄機で洗浄



伝統工法で基礎石の加工を行う

石橋技術者の養成講座を開始して10年がたちました。熊本県上益城郡山都町の緑地広場実習場では昨年(2020)年から、1988(昭和63)年に豪雨災害で被災後に解体された「北川内橋」(旧矢部町)の石材を使った石橋の移設・再生にチャレンジしています。保存されていた石材を調べてみると劣化が進んでいて、およそ半数しか使えないことが判明したため復元ではなく、「リサイクル型新築」として石橋を架設する実習を計画しました。それでも、かつての北川内橋の面影を残した再生を目指しています。橋名は「シン北川内橋」。

実習は土曜のみ年間6回実施し、2020年度に基礎工事と輪石の仮組み、翌21年度は実際に川に支保工を渡して起拱石(アーチ輪石の1列目)の据付け寸前まで進みました。しかし、石橋は計12回で完成するものではありません。もし予想できないほどの大雨が降れば、支保工もろとも流されるリスクを抱えています。そこで予定の講座終了後は、石造文化財技術機構ITOSC(A7面に関連記事)資格証者であるプロ職人に作業を手伝ってもらった計画を立てました。

プロの仕事を目にする機会は、匠の技を現場で学べる好機でもあるので、ACTS掲示板で作業日時を告知し、労働安全衛生規則順守を条件に興味のある方や技術の習得をしたい方の参加を受け付ける予定です。

こうした石橋技術者養成講座を開講した当初を思い返すと、石橋の「修繕・利活用」ができる技術的な機能が日本各地で失われていったことが石橋を消失させる大きな要因となった点を苦慮したものでした。日本の石橋を守る会の技術系会員にとってそうした状況は、自分たちの存在価値をおとしめ、技術者の沽券(こけん)にも関わる大問題と受けとめました。

石橋が修繕・利活用されるようになるには、石橋の社会背景を知り、現存するその性能や健全度調査、関係者の利害解消、利活用計画の策定や設計などについて、科学的で実効的な計画を適切に実行できる機能が必要です。そのような観点から、石橋に関する各種の技術情報を収集できる高い「プラットフォーム」と豊富なノウハウを保有するITOSC(A7面に関連記事)は、石橋の保護に貢献できる貴重な専門組織であると考えられます。

そして石橋架設・修復に関する高い施工技術を有する人材を養成するのがわれわれ石橋伝統技術保存協会ACTS(A7面に関連記事)です。技術者の養成には長い育成期間と多くの施工の機会が必要です。養成講座が途絶えることのないよう努力し、長く続けていきたいと思います。(理事長・尾上一哉)

石橋を中心に公園化し保存

連載の最後となる今回は、中国での石橋の保存状況について報告します。

私は文献資料を頼りに中国各地に残る350橋余りの古橋を巡りましたが、現地を訪ねると3橋がなくなっていただけで、ほとんどが健在でした。日本では再建どころか、貴重な石橋を意図

「中国の古橋」撮影記 その7

榊 晃弘 (福岡県)



中国の代表的な空腹式アーチ橋「単橋」 写真提供/榊 晃弘
=河北省滄州市、明代の1629年架設、全長77.5m

的に撤去するケースもあるのに。中国で橋を管理するのは行政の土木部門ではなく、より強い権限を持つ考古学部門といわれていますが、それでもこれほどの古橋が現存するのは見事です。考古学に精通した現地ガイドの説明を借りると、「橋の活用と管理費用をうまくドッキングする方法の採用」によつ

て橋の保存、修理が行われているのです。まず橋を目玉にする公園を造って入園料を徴収し、それを橋の修理費に充てる仕組みで、有名な北京市の「盧溝橋」、河北省の「趙州橋」、四川省の「壩定橋」などその方式が採用されています。「中国の古橋」の撮影で思い出すのは、河北省の「弘濟橋」を訪れた強風の日のこと。公園化工事の真っ最中だったので砂塵の大歓迎を受け、レンズ交換もままありませんでした。また美しい空腹式アーチ橋として知られる河北省の「単橋」も公園化の最中で、イメージした写真を諦めざるをえなかったのですが、アングルを求めて橋の周りを歩き回っていると、私の姿を遠くから見ていた地元の高齢者が近寄つてきて、「日本の方ですか、今、橋公園を作っていると聞きます。2〜3年すると美しい公園ができますから、またぜひ撮影に来てください」と親しく声をかけてくれました。文化大革命(1966〜76年)の折、単橋は壊されることになったが、地元民が必死に守ったといわれます。古橋に対する地元民の強い思いを感じました。

「中国の古橋」撮影記(完)

石工だった父の思い出とこれから

会員 赤星文生(福岡県)

会報発刊通算100号、おめでとうございませう。私事で恐縮ですが、会へのエールとして投稿します。大分県の片田舎に生まれた私は20年後に故郷を離れ、社会人となり40年。今は仕事の一部が石橋に関連してます。

会員になったのはほんの3年前です。故郷にも多くの石橋があることは知っていました。ちなみに私の父は石工。もつぱら「間知石(けんちいし)」を扱う職人でした。子どもの頃、大きな岩を発破で切り出し、くさびを使って小割にした後に出来上がる、見事な四角錐に魅了されたのを覚えています。そのとき私の役目は間知石が出来た後に残る、いわゆる「栗石(ぐりいし)」を集めること。定期的に父の造った間知石と私が集めた栗石がトラックで運ばれて行く。私の少年時代は、そんなゆつたりした時間が流れていたものでした。

さて今の私はというと、さまざまな力たちで社会貢献事業を行う一般社団法人九州地域づくり協会に属しています。日本の石橋を守る会との出会いは大分県の院内町で開催された大会のときでした。それから石工養成講座を支援させていただきました。そのほか、旧街道筋にたたずむ石橋と地域の生業を住民の方々とともに物語

九州地域づくり協会提供の「インフラカード」

河川、道路、橋、港などのインフラを身近に触れ、その役割を理解していただく簡易な広報ツールとして配布するカード



化(ヒストリア化)する企画を進めています。江戸期から各地域に現存する石橋は、単体としては土木遺産あるいは文化財として扱われています。これを単体に終わらせず、「なぜ、そこに設けられたのか(背景と目的)」、「土地の成り立ちと石橋がうまくストーリー化され、内外の訪問客の理解が地域の活性化にどうつながるか」を軸に、地域の記憶を継承する(語りとかたる)取り組みを模索しています。

端的に言うと、石橋そのものの造形美とそれを取り巻くヒストリアに、内外の訪問客がへへえ、ほお〜と感嘆するところが、地域の魅力度の向上、そして次代を担う石工の生きがいになるのではと期待しているところです。

ひいては本会の広報が目指す、「双方向でコミュニケーションできる仕組み」にもつながるのではないのでしょうか。

※間知石とは石垣や護岸、擁壁などに使用する四角錐形の石材

沖繩石橋との出会い

会員 島崎敏之(熊本県)

ボクと石橋との出会いは沖繩の女性との出会いがきっかけだった。それは同時に沖繩の石橋との出会いでもあった。そして沖繩の石橋は、沖繩の歴史同様、日本の石橋とは違う歴史を歩んでいたことを知る!!

その全てを知りたくなり、沖繩を訪れるようになった。沖繩で出会った女性が案内役をしてくれ、こちらでは手に入らない書物で下調べをして、ボクの持っている資料にはない石橋を見つけてくれたりして本当に助かった!!

さて沖繩において初めて石橋が架けられたのは、独立国だった琉球王朝時代の中国の明王朝との朝貢貿易のための国営事業として架けられた「長疋堤」が最初である。日本に石橋が最初に架けられた時よりも約200年も前のことである!!

架橋法の技術がどこから伝わったのか、一般には中国由来であるというのが定説である。実際「長疋堤」を架けたときの指導者は国相(首相)・懐機という中国出身者で作業員も中国出身者が多かったという。

沖繩には14世紀中ごろにはすでに貿易関係の中国人集団が移り住んでいたという。まだ統一王朝が樹立される前の時代。当時、一番勢力が強かった中山

王・察度が中国との貿易を推し進めた結果である。しかし技術伝搬の確かな資料などは残っていないので推察の域を出ない。特にアーチの技法については石橋よりも30年も前にお城のアーチ門として突然に出現している!!

そのアーチ形状は当時沖繩と関係が深かった中国福建省にはないものだったので、沖繩独自の技術だと唱える研究者もいる。

それはともかく、沖繩の石橋の形状はそのアーチ城門とそっくりの形状をしている。沖繩の河川は大きなものがないので、その技術の応用で架けたと思われる。河口に近い川幅の広いところではアーチを連結させたものが架けられた。

現在見ることでできる石橋がほとんど同じように見えるのは城門の技術を応用したからだと考えている。しかし多連橋の全てが1945年の沖繩戦で破壊されてしまった!!

その一方で、近年架けられた石橋は日本の技術が導入されたのか、個性的



沖縄県宮古島のマングローブ公園内に架かる「島尻入江橋」

な石橋が架けられている。そんな中でボクの思い入れ深い石橋となったのは平成の時代になって架けられた新しい石橋!! 2002年9月に竣工した宮古島のマングローブ林の遊歩道に架けられた「島尻入江橋」である。

宮古島を2回目に訪れたとき、夕食を取っていた居酒屋のテレビで竣工式の様子が放映されていた。早速その翌日に現地を訪れてみると、昔ながらのアーチ城門を連結させた4連の石橋!! それもアーチ径が4つとも違うという個性的な石橋であった。

石材は機械で加工してあるけれど、架橋法そのものは昔ながらの技術だと分かった。もう一目惚れである!!

石橋の魅力はその歴史にもあることは確かである。特に沖繩の石橋の歴史は日本よりも古いので、その歴史自体が魅力的である。

でも、ボクの心を虜(とりこ)にしたのは、この新しい石橋であった!!

※参考文献/福島駿介「沖繩の石造文化」、城間勇吉「世界遺産クスク」

生前、上塚尚孝会長から預かった「松山橋」(熊本県八代市)に関する文とカット画を紹介する。

松山橋を架けた石工

東陽町の松山橋を架けた石工は川野賢三だったはずだがと、曖昧な記憶をたどった。副会長の橋本幸一さんのご母堂・フサ子さんに確かめたところ、やはりその通りで、ご実家が川野さんと懇意で、家の石垣も造ってもらったとのこと。「私たちは松山橋を『淵ノ川の橋』と言いよりました。水が澄んで昔はもつと深かったので、泳いだりしました」と話された。

目を閉じると、橋の近くの柿の木に熟した実が鈴なりになった風景を思い出す。筆者が心に刻み込んでいる松山橋が最も輝く秋景である。



松山橋
カット画/上塚尚孝

追悼 上塚尚孝会長

2021年10月6日、上塚尚孝会長がリンパ腫により永眠された。86歳。

上塚氏は熊本県宇城市出身。40年間教師生活を終えた後、1999年に旧東陽村の要請で東陽石匠館の2代目館長に就任、「史実資料に基づく種山石工列伝」(東陽村役場)を編集。2014に名誉館長となり16年まで務めた。1980年の日本の石橋を守る会結成時からの会員で、2002年に事務局長、11年には石工養成事業の実行委員長を務め、17年に会長に就任。

「熊本の目鑑橋345」(熊本日日新聞社)で16年の熊日出版文化賞を受賞。同年に熊本日日新聞「わたしを語る」欄に「石の虹、追いかけて」が35回連載される。17年に熊本県文化協会の荒木精之記念文化功労者に選ばれた。逝去を受けて募集した追悼文を紹介する。(広報部)

上塚尚孝会長の思い出

理事 成田廉司(熊本県)

上塚尚孝先生といえば、まず浮かぶのがあの優しい眼差しとほほ笑みです。その笑みを浮かべておっしゃったお話を

今でも忘れられません。

「めがね橋の写真とスケッチ、どう違うと思いますか。写真を撮るのは一瞬ですが、スケッチをするのにはある程度の時間が必要です。時間をかけることは決して無駄ではありません。それ



イラスト提供/なず
上塚尚孝先生の熊日新聞コラムがきっかけで石橋に興味を持ち、先生がガイドされる石橋見学ツアーに参加して、ますます石橋の世界が大好きになりました。

だけ長く、めがね橋と向き合っているということ。一対二で静かに向き合っている。めがね橋が語り掛けてくれます。今まで気付かなかったことが見えてきます」

とても感慨深いお言葉でした。

当時の私は高校のPC同好会の顧問をしていて、生徒たちが発信するウェブサイト「肥後の石橋」などに使用する



る写真を撮り回っていました。限られた時間の中で、めがね橋とゆっくり向き合うこともなく、無造作にシャッターを切っていた自分に気付きました。めがね橋のスケッチの意味を肝に銘じておきます。

物言わぬ石橋が現代のわれわれに語り掛けてくれるもの(時代文化、習慣、暮らし、技術…)、その声を広く大きく代弁するのが「日本の石橋を守る会」だと思えます。先生の教えを受け継がねばと、強く思っているところです。

上塚尚孝先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

巨星落つ

左の文は昨年11月3日付け熊本日日新聞の読者投稿欄に掲載された会員の田上あけみさん(熊本県)の追悼文です。

「巨星落つ」。先日「熊本の目鑑橋345」を編まれた上塚尚孝氏の訃報を聞いて驚いた。そして、頭に浮かんだのがこの言葉だった。

私は、自称「石橋ウオッチャー」。県

内外の石橋を巡っている。

氏との出会いは20年余りにさかのぼる。石橋好きの聖地、八代の「東陽石匠館」を訪ねた。この時、氏は館長であり、自ら石橋の説明をされた。そして周辺の石橋群も一緒に巡った。

氏の洒脱(しゃだつ)で優しい語り口、そして味のある筆致の手書きの説明ボード…。私は石橋と同じくらい、氏の大ファンになった。

その後、熊日主催の「石橋ツアー」にも参加。もちろん車中や現地での氏のユーモアあふれる解説。石橋に関する私の新聞投稿にも感想の手紙を頂き、以来文通をしていた。

もつともつ一緒に石橋を巡りたかった。そして、手紙のやりとりも。残念しきりだ。

厳しかった暑さも、ようやく収まり、いよいよこれからが石橋巡りの季節到来と思っていたのに…。

でも手元には熊日に連載された「私を語る」の『石の虹、追いかけて』をつづつたものがある。今再び、これを読んで(しの)んでいる。すると穏やかな氏の声が聞こえてくるようだ。

そして、「熊本の目鑑橋345」も。この本を携えて、心の中の上塚氏と一緒に、この秋は石橋を訪ねよう。

石橋のつる風

私の住んでいる佐世保市吉井町には
8基の石橋が現存している。その内、樋



すえなが のぶを 「前岳橋」
長崎県佐世保市吉井町

口橋、前岳橋、春明橋の3基が今年、10歳を迎えた。スケッチ画は前岳橋（橋長20・5m）を描いたもの。
3基が架設された大正11年は北松浦半島で採炭鉱業が興隆し、吉井町（当時は村）では道路改修や鉄道の敷設などが進んでいた。とはいえ、県からの補助金や村債はほとんど樋口橋に充てられ、前岳橋の架設費用は村民の寄付によって賄われたとされる。3基の石橋を同時に架けるといふ、当時の村民の並々ならぬ町づくりの意思が痛いほどに感じられる。

前岳橋は佐々川と福井川の合流点近くに架かる。架橋によって町の交通の利便は極度に増し、文化・経済の好循環が作り出された。平成15年に路面が拡幅され、下流側に車道と歩道ができた。

上方に架かるのは平成27年供用の大渡バイパス（全長300m余り）。石橋を原型とした充腹アーチ橋の建設を要望したが、地形的に実現できなかった。
現在、先人の労苦や、それによって発展してきたふるさとを認識し、素晴らしい石橋の文化を後世に引き継ぐこと、3基の石橋の架設100周年を記念する式典の準備が地元で進められている。
（水彩画、文||末永暢雄）

「SNSリポーター」募集

「石橋情報の特派員」お願いします！

理事 中村まさあき(熊本県)
冊子形式の会報「日本のいしばし」は今回の通算100号で休刊となりますが、情報社会の進展とコロナ禍の状況を踏まえ今後は、ネットを活用した会員相互の情報交流を促す広報の在り方へと転換を図りたいと考えています。
そこでこのたびは、「石橋情報の特派員」の役割をボランティアで果たしていただける「SNSリポーター」を募集いたします。

「SNSリポーター」になっていただける方はメールを…
koho@ishibashi-mamorukai.jp

SNSリポーターの方は普段、個人的に利用しているSNS（フェイスブック、インスタグラム、ツイッター、ラインほか）情報の中で、興味を引かれた石橋情報を広報担当の中村まさあき宛にお寄せください。そうした情報をコンパクトなニュースにまとめたダイレクトメールを、全国の会員に年2回程度郵送します。またイベント開催など期限のある情報については、本会のウェブサイトにネット掲示板、チームルームなどに情報を転送して拡散を図ります。
ネット情報は必要な人が必要な

ときにアクセスして活用でき、自らも発信することで共感の輪が広がるのだと思います。「いいね」と発信するだけで手軽に共感を伝えることもできます。
石橋の魅力や価値も、多様な感性や価値観を持った人々の共感の中で確認されてこそ、社会に広く認められるようになるのではないかと思います。それがひいては、石橋のある地域に住む人たちの石橋を守る行動を支援することにつながると期待しています。会員相互の情報交流促進の取り組みに賛同と協力をお願いします。

大会情報 2020年5月21日(土)・22日(日)
第43回大会を熊本県八代市で開催予定

編集後記

本号は休刊記念号として、会員の石橋に対する多様な関わりを浮かび上がらせることができたらと思いい、編集に努めました。100号を記念したコメントを片寄俊秀元会長にご寄稿いただきました。たのですが、病氣療養中で、それができない状況。昨年10月には上塚尚孝会長が逝去され、本会の歴史の大きな節目を感じました。

歴史を重ねた冊子形式の「日本のいしばし」はこれで休刊となります。これまでの会報制作をご支援いただいた方々、読者の方々に厚くお礼を申し上げます。今後は会員相互の情報交流を後押しする広報の在り方を目指していきます。
（広報部長・中村まさあき）

日本の石橋を守る会 ～石橋とその文化を大切に～

会報100号(通算) 2022(令和4)年3月30日発行

編集責任者 中村まさあき
事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2
通潤橋史料館内 ☎0967(72)3360
HP <http://www.ishibashi-mamorukai.jp>
BBS <http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/>